カンキツにおけるフジコナカイガラムシの発生生態と防除対策

フジコナカイガラムシは、カキやブドウ等の落葉果樹における重要害虫であるが、近年、カンキツでも多発し問題となっている。しかし、これまでカンキツでの詳細な調査事例が無く、不明な点が多かったことから2008年から３ヵ年試験を行ったので、その結果を紹介する。

写真１　フジコナカイガラムシ寄生果

１、発生生態

①越冬状況：カンキツでは、主に幹、太枝の樹皮の割れ目、葉(特にミカンハモグリガ等の被害により奇形化した葉)などの目立たない部位で越冬していた(写真２・図１)。このため、越冬期のマシン油乳剤は、虫体に薬液が到達しにくく、通常の散布量では十分な防除効果が得られにくいと考えられた。以上のことから、冬季の本剤散布はより丁寧に行うとともに、本種に対しては、より効果のある生育期の防除に重点を置く必要がある。

写真２　フジコナカイガラムシ越冬状況

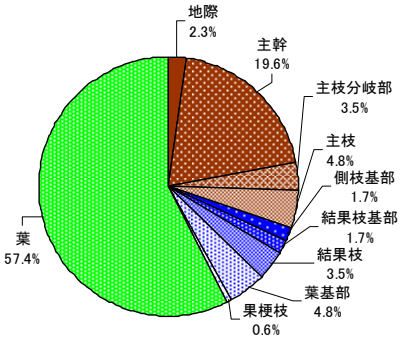

図１　フジコナカイガラムシ越冬時の寄生部位（12月調査　n＝479）

②発生消長：年間３回発生し、１齢幼虫のピークは６月中旬、８月上旬、９月下旬～10月上旬に見られた。これは、従来のカキでの調査結果と変化は無く、温暖化による発生の明確な前進化や世代数の増加は無いものと考えられた。ただし、夏季が高温であった2010年は、９月以降の第３世代の発生量が多くなったことから(図２)、越冬密度の高くなる年があるものと思われる。

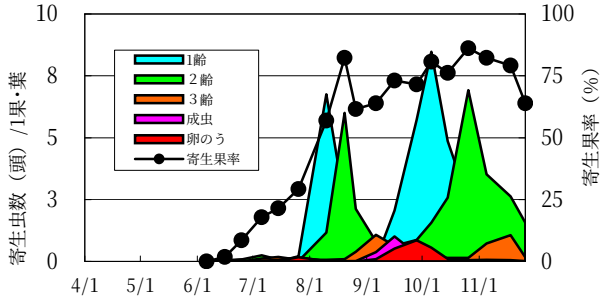

図２　フジコナカイガラムシ発生消長（2010　松山市北条）

2、防除対策

①防除時期：成虫は、薬剤の防除効果が低いため、効果の高い若齢幼虫を対象に防除することが重要である。１の②の結果より、第１世代は６月中下旬、第２世代は８月中旬頃が適期と考えられた。特に、齢期が比較的揃っている第１世代の防除が最も重要である。

②有効防除薬剤：アプロード水和剤・ジメトエート乳剤・ダーズバン乳剤の順に効果が高かった（図３)。ただし、多発時には、それらの剤でも１回散布では効果は低かったことから、１回目の散布から2～3週間後に再度散布する必要がある。

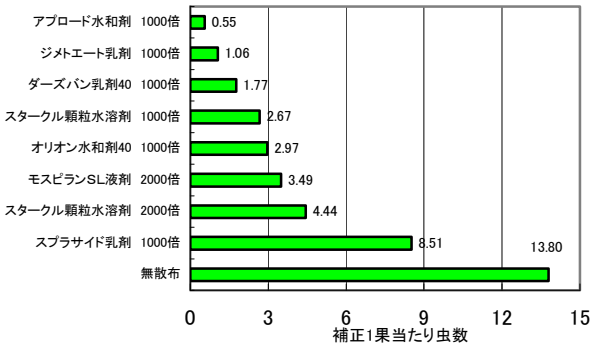

図３　フジコナカイガラムシに対する各種薬剤の防除効果（6/18、7/1に各区２回散布　7/16調査　2008松山市北条）

③散布方法：現地慣行防除園での調査より、本種に対しては、スプリンクラー防除では十分な効果が得られていないことが明らかとなった。そのため、本種に対する防除は、手散布で丁寧に行うことが重要なポイントである。

（虫害班　主任研究員　宮下裕司）

編集発行：愛媛県農林水産研究所　果樹研究センター
〒791－0112　松山市下伊台町1618　TEL：089-977-2100　FAX：089-977-2451